

大会を終えて

大会企画委員会

はじめに

343名という参加者を得て、第27回長野大会を無事に終了することができました。長野県立歴史館、松本市文書館、全国大会長野県実行委員会、長野県史料保存活用連絡協議会、その他開催県の方々の御尽力に感謝申し上げます。また、御協力をいただきました全史料協会長事務局、各委員会、会員の皆様にお礼申し上げます。

アンケート集計結果

さて、大会からちょうど1か月を経た12月7日（金）、委員会において大会の総括と反省を行いました。議論に際しては、主催者側の印象に偏らないよう、例年大会参加者からのアンケート結果の意見等、委員会以外からの意見を資料としてきましたが、今回はアンケート回収数が35と、参加者の1割程度の回収率にとどまってしまいました（昨年度82通）。この回収率の低さ自体、今大会の反省点の一つにあげねばならないのですが、まずは、その集計結果をお知らせします。

- 1 開催期間：適当(25)／長い(5)／その他(4)／無回答(1)／短い(0)
- 2 日程の組み方：適当(28)／どちらともいえない(5)／無回答(2)／不適当(0)
- 3 大会テーマ：適当(28)／どちらともいえない(4)／無回答(2)／不適当(0)

以上は数値的に集計できる部分ですが、具体的に意見や感想を書いていた部分も含め、全体的には概ね好意的な評価をいただけたようです。以下、委員会での議論をもとに、大会の総括・反省を記したいと思います。「毎年同じ反省の繰り返しになっていないか」の自戒を込め、昨年度大会特集号（本誌第55号、以下「前稿」と記す）で提示した課題や反省点を再確認しながら記すこととします。

全体日程

3日間という日程に対し、アンケート回答の多くは「適当」としており、すでに来年度も同様の日程で準備がスタートしています。しかし、前泊を要する等の理由から「長い」とする意見も5件、15%いただいています。この「長い」という意見に対し前稿では、「3日間の中で参加者が選択の幅をもちやすい構成や、限られた時間内での充実した運営が求められることになる」と記しました。今回、特に後者の「充実した運営」のため、研究会の準備には、昨年度以上の議論と時間をかけたと思います。また、新企画の意見交換会は、会場の両館に新たな企画準備をお願いすることになりましたが、研究会等への好意的なアンケート結果からは、一定の成果があったものと感じています。

しかし、そのためもあって開催県への負担が過重になっているということも、一方で実感しています。「開催県の特徴を生かした大会」は、委員会としても求めてきたところですが、準備・運営だけでも大変な開催県に、企画や報告等の役割をも求めることになっています。このあたりはスタッフ数等、開催県の条件によって柔軟に考えていかなければならないと思います。

大分大会では、直接の事務局となった公文書館だけでなく、先哲史料館や図書館が協力して運営や報告・司会等に当たってくれました。長野大会では、県内の機関会員・個人会員で実行委員会が組織され、長野県史料保存活用連絡協議会のスタッフが運営に協力してくださいました。大会は、すでに開催県事務局となる県の文書館機関単独の運営では困難な規模となっているといえます。開催県内の史料協議会、あるいは開催県を含む地域部会や広域の協議会など、複数機関の協力による運営が不可欠といえましょう。大分、長野両県でそうであったように、

本委員会とは別に開催県を中心とした実行委員会の組織を考える必要もあるでしょうし、本委員会自体を全史料協の常置委員会としての位置付けから、大会ごとに組織される実行委員会方式に改組していくことも検討されているのではないかと思います。

一方、大会日程そのものの再検討も視野にしなければいけない時期にきているようです。今回、開催県事務局の長野県立歴史館から「参加者の便や開催県の事情（今後は二順目に向かう）を考えると、やはり2日ではないか」と、主催してみたい意見をいただきました。具体的には、総会と研修会を別開催にするなどの案が出されました。年度を半ば以上経過した時点での総会開催への疑問は常に出されているところです。しかしながら、総会単独開催時の参加者数への懸念がありました。また、研修会も単独で開催する場合には全国からの参加は困難、との見通しもあり、大会時に併催する形をとってきました。この両者を年度の早い時期に同時開催すれば、一定の参加者も見込め、また、研修会と大会に別人を派遣できる、との案です。

もちろん、いずれも具体的に検討していけば問題も多いと思われます。また、大会企画委員会だけでなく、研修研究委員会や会長事務局をはじめ、会全体で検討しなければならない課題です。しかし、大会も27回を数え、研修会が大会併催で開かれるようになってから10年以上が経過しました。二順目が近い開催県持ち回りという開催スタイル、経費分担も含め、大会のあり方自体も再検討が求められているように感じます。

視察と意見交換会

前稿に「従来と異なる大きな特徴は、最終第3日を視察のみとしたことです」とあります。これは、地理的・交通的な条件から、大会日程を最終日午前で終了させる必要があったためでした。遠方参加の財政的・日程的条件への配慮として概ね好意的に受けとめられましたが、研究会のための時間が制約されることへの批判もあげられました。

今大会は、第3日の朝から視察会場に移動する日程をとったことは昨年同様ですが、新たな企画として「意見交換会」を加えました。午前中での終了を維持しつつ、協議の時間も増やす対応です。当然、視察の時間が削られることになりますが、両館の好意的な対応により、密度濃く実施できたと考えています。全国からの関係者が一度に集う大会時にしかできないものなど、プログラムの優先順位を考える必要もあることを意識させられます。

もうひとつ、財政的な課題があります。参加者数の増加に伴う有料施設借用化は、第3日も会場を使用するか否かで大会予算を大きく左右するようになりました。一方、近年の自治体財政状況から、開催県に過大な負担をお願いすることはできなくなってきました。全史料協の財政が豊かでないことは言うまでもありません。来年度の富山大会でも同様の事情から、第3日は朝から視察会場に移動することを予定しています。これに開催県及び視察会場の地理的条件や視察施設の規模等の条件が絡み合ってきますので、常に今回と同様の日程が組めるとも限りません。その年、その場所の様々な条件の中、3日間全体でベストと考えられる日程を工夫していきたいと考えています。

自由テーマ研究会と意見交換会

昨年度、自由テーマ研究会を休止したことに對し、そのデメリットを指摘する意見を多くいただきました。この休止は地理的条件による日程上の問題からの措置であり、本委員会としても同研究会を不要と考えてのことではなかったので、前稿には「支持の多さを念頭に、今後の大会構成を考えていきたい」と記しました。本大会でも日程の調整にむつかしいところはあったのですが、基本的に同研究会の開催を決定し、報告者の募集を行いました。しかしながら応募は1人とどまりました。幸い、大会テーマに合致するものであったので、その分科会で報告していただくことになりましたが、自由テーマ研究会を望む声と報告希望の有無は必ずしも合致しないことが再確認されました。

一方で視察予定施設であった両館からは、施設見学だけではなく、視察館に因んだテーマによる何らかの研究会を開催したい、との希望がありました。いってみれば、この両館が募集に手を挙げてくれた、といっているのかもしれませんが。そこで、考え出されたのが意見交換会です。自由テーマ研究会が報告者主体であるのに対し、メインの報告者を立てず、コーディネーターの切り回しのもとで、より気楽に意見を出し合い、情報交換できる場、として考えられました。もちろん、視察との兼ね合いからくる時間的条件も考慮されてのことです。

結果的には、両会場とも比較的好意的に受けとめられたようです。必ずしも結論や方向性を求めない気安さ、参加者それぞれにとって有効な情報交換、といった面に漠然と研究会との差異を考えていたのですが、それ以上の議論的深まりがありました。コーディネーターが事前に発言を依頼していた方を含め、コンパクトに多くの事例や意見、情報が交わされました。会員にとって切実なテーマの選択と、コーディネーターによる適切な判断と進行があれば、メイン報告なしの議論が十分に可能であり、有効であることを感じさせるものでした。

現在の日程では自由テーマ研究会と意見交換会の両者ともに開催することは困難であり、いずれかの選択が求められます。あるいは、意見交換会のテーマやコーディネーターを公募する方法も考えられるのかもしれませんが。いずれにしても募集期間の設定が絡む案件ですので、大会テーマ研究会を含めた日程や会場等の諸条件も考慮に入れ、次期富山大会に関しては早期に決定したいと考えています。

大会テーマ研究会

新潟大会、大分大会と、開催県からのテーマ提案を基本とし、結果的に報告者もすべて開催県から、というテーマ研究会となりました。開催県の特徴・課題を生かした設定に対しては、評価と批判の両者をいただきました。本委員会としても、全国的な動向や課題、会の取り組みという「全国大会」と、開催地を替えての開催、

開催地への普及と活性化という「地方大会」の両面がうまく調和する方向を目指しています。結果的に「地方大会」色が強くなっているとするれば、その要因として「開催県からの提案が熱意をもってなされているのに対し、全史料協側の今日的な課題や問題への取り組みや提起が弱くなっている結果が、大会テーマにも現れているのかもしれませんが」と前稿では記しました。

今大会も、テーマの原案は開催県からいただきました。その内容は、21世紀最初の年の開催でもあり、現実には解決を迫られている緊急の課題を優先したものでしたが、あわせて、そのテーマを「長野の窓」を通して提起しようとするものでもありました。大会冒頭、長野県立歴史館の梅原委員が行った基調報告は、全国的な課題を的確に整理し、長野の事例で具体化させるという、「全国大会」「地方大会」両者の性格を備えた、これまでにないテーマ提起になったと思っています。

また、前稿では「本来、全史料協としての活動方針や国内外の動向への対応姿勢が議論される場」が必要、とも記しました。この点との関係で言えば、今年度第1回役員会で、情報公開法の施行や市町村合併促進にともなう史料散逸危機への早急な取り組みが提起され、新設された資料保存委員会と総務委員会がその任にあたることに決定されました。その後の資料保存委員会の活動は、本委員会においても大会の企画・準備過程で注目するところでした。大会テーマで取り上げようとしている課題が、研究会のなかだけのことでなく全史料協そのものの活動として取り組まれていることが、大会での議論に厚みを加えてくれることを期待させたからです。

この期待は、同委員会の委員長が開催県の小松芳郎松本市文書館長であった幸運もあり、全体会Ⅱの全体討論を同委員会と本委員会の共同進行（コメンテーターと司会）ともいうような形にすることで結実しました。その議論は、社会状況に対する全史料協の活動や課題に絞ったものとなりましたが、大会参加者全員によるこのような議論は20回記念大会以来のことと思ひ

ます。また、初めての試みとしてコメンテーターと司会による「まとめ」を大会中にペーパーで配布しました（本誌49pに掲載）。「大会決議」とまでは行きませんが、両者の名における「まとめ」ならば可能、と試みたものです。

翌日配布等の条件もあり、このペーパーには実際に研究会でいただいた多くの意見や提言を載せることはできませんでした。しかし、全史料協の活動への大会からの提言・意見について本委員会には、その内容を全会員に伝えとともに、会の運営に生かしてもらえよう報告する責務があると思い作成したものです。幸い、参加していない会員に対しても、記録を務めてくださった清水恵枝さんと編集出版委員会の御協力により、本誌によってその内容を知っていただけたと思います。

なお、今年度から会長事務局が毎回の委員会にオブザーバーとして参加してくれています。これは、全史料協の活動や課題を大会に反映し、また、逆に大会の成果を会運営に吸い上げてもら

うためをお願いしたもので、会長事務局からも快諾をいただいていた結果です。その趣旨がここでも生きることになり、12月の委員会では事務局でまとめた「全体会Ⅱにおける会員から全史料協への意見・提言」を資料として提出、会長事務局にも持ち帰っていただきました。2月の役員会では、大会の総括と共にこれら提言・意見についても報告する予定でいます。

おわりに

以上、昨年の大会特集号に記した反省点や課題を起点として、長野大会を振り返ってみました。少しは前進したかと思えるところもあれば、まだまだ課題山積といった感もあります。

大会は全会員のためのものであり、出席できない会員を含め、会員一人一人が参加意識を持つことなしには成り立ちません。富山大会での更なる前進のために、多くの皆様からの御意見、御提案、そして御協力をいただければ幸いです。